２０００ＤＬ記念ＳＳ

『薄氷の戯れ』

※グロウルート選択後、ＳＭプレイを少しずつ覚えていく。

1

私をさらったグロウは、私の保護者として、私をいつくしんでくれた。
強くて優しいグロウに守られながら過ごす日々は穏やかで、私は小さな子供のころに、両親に甘えて過ごした日々を思い出していた。
けど、本当は気づいていた。
チリリと、皮膚が焼けるような違和感。
ふと私の頬を撫でるグロウの指から、私を見つめる優し気な瞳から、私の名前を呼ぶ声から、ひどく硬質な〝壁〟を感じることに気づいていた。
グロウは私に嘘をついている。
その嘘が何なのか、私は知りたかった。
知らなくてよかったのかもしれない。
知らない方がよかったのかもしれない。
けど、私は暴いた。
知ってしまった。

そしたらもう、知らなかったころには戻れない。

†††

「――我が姫。少し、地下に降りる」
ある日の午後、グロウがそれだけ言い残して地下へと消えた。
「ついて行った方がいい？」
と私が聞くと、
「あなたがそうしたいのなら」
とグロウは答える。
こんな風に地下室に呼ばれるのが、いつからかグロウの〝合図〟になった。
呼ばれると言っても、強制力はない。
ただグロウが「地下に行く」と言って姿を消して、私はついて行っても、行かなくてもいい。
私がついて行かない日、グロウは地下で一人で過ごす。

地下で一人で何をしているのか聞いても、グロウは「ただ、一人でいる」とあいまいに笑って、何も教えてくれない。
だから私は気になって、恐る恐る地下に降りる。
そうすると、薄暗い地下室で、ぼうっと物思いにふけっていたグロウが、まるで急に目を覚ましたみたいに微笑んで、私に優しく手招きするのだ。
そしてこう聞く。

「さぁ、我が姫。今日は私にどうされたい？」

当然、私はいつも答えられない。
だって私は、好んで被虐趣味に傾倒してるわけじゃない。
グロウが私に苦痛を与えたいというから、それを受け入れてあげているだけだ。
だから私の答えはいつも決まってる。
「グロウはどうしたいの？」
私がこう聞き返すと、グロウは本当に、いたずらを考える子供みたいな目で笑う。
地下室は、まるでグロウのおもちゃ箱だ。
鍵のかかった箱を開けると、いろんな物が飛び出してくる。
黒い革の目隠しと、ベルベットと綿の手錠。
それと、長くて太い鞭。
「……それ、前からあった？」
「あつらえた」
縄を編んだような、細くて長い黒い鞭は、グロウの手にしっくりと馴染んでいる。
「それで……私を打つ……？」
「さて……どうだろうな。私も少し悩んでいる」
「どうして？」
「持ってごらん」
グロウは私に鞭を差し出した。
輪っかにして束ねてあるその鞭は思ったよりもずっしりと重い。
「なんか……鞭の先っぽ、ほどけてる？　ばらばらになってる」
「そうしておくと、少し痛みが和らぐんだ。衝撃が分散する」
「そうなんだ」
「拷問に使う物なら、先端は細く硬い。バラ鞭でも、鋲を打ってあれば皮膚をずたずたに引き裂く。それに比べれば、これは見掛け倒しのおもちゃだな」
「どうして私に渡すの？」
「それで私を打ってみるといい」
「え……私が！？」

ビックリして聞き返すと、グロウは上着とシャツを脱いで、私に背中を向けた。
広くて大きな背中だ。
でも、鞭を振り下ろす気になんてなれない。
「で、できないよ、グロウ……やりたくない」
「大丈夫だ、我が姫。あなたがどれほど力を込めて鞭を振るっても、その鞭で私を傷つけることは難しい。さぁ、ほら」
「グロウって、マゾのけもあるの？」
「試したことはないが、あなたに与えられる苦痛ならばさぞ甘美なことだろうな」
くつくつと笑うグロウは、今から私に鞭で打たれようとしてるはずなのに、少しもマゾという感じがしない。
どちらかと言うと、私が鞭を持ってオロオロしてるのを見て楽しんでる感じだ。
「わ、私ができないってわかってて、そんな事言うの？」
「いいや。だがあなたは、自分がこれらから受ける苦痛がどれほどのものか、知っておくべきだ」
ぞわりと、全身に鳥肌が立った。
私の手の中にある、重い鞭。
私がこれでグロウを打ったら、グロウはこれで私を打つんだ。
私は選択を迫られている。
傷つける覚悟と、傷つけられる覚悟。
今、私に背中を向けているグロウは、明日私がグロウに見せる背中だ。
鞭を捨てて、こんな事したくないと叫んで、地下室から出て行きたい気持ちが湧き上がる。
だけど、ほんの少し、グロウの背中にこの鞭を振り下ろしてみたい気持ちもある。
「……力、入れなくてもいい？」
「いいとも。あなたの思う通りにやってみるといい」
私は大きく息を吸い込んだ。
心臓がどきどきする。
涙が出そう。
「我が姫。どうか、目を閉じないでほしい。それはとても危険なことだから」
「う、うん……」
私は鞭を振り上げた。
軽く振り下ろしてみたけど、床に垂れた鞭の先端が軽くのたうっただけで、それはグロウの背中には届かない。
ふ、とグロウが軽く噴き出した。
「な、何で笑うの……！」
「言っただろう？　思い切り力を込めても、あなたの鞭で私が傷つくことはないと」

「そんな事言うと、思いっきり力入れるから……！」
「気長に待つとしよう」
私は鞭をぎゅっと握って、今度こそ思い切り振り降ろした。
鞭の先端が空を切って、グロウの背中をバシっと叩く。
……本当に、バシって感じ。全然痛そうじゃない、背中もちっとも赤くなってない。
「こ、この鞭、本当にオモチャなの……！？」
「力を入れなければ、その程度だろうな」
「思いっきり入れたのに……！」
グロウは闊達に笑って、振り向いた。
「どう思う？」
「どうって……？」
「私はあなたを、その鞭で打っても問題ないだろうか？」
「そ……れは……」
私が思い切り鞭を振り下ろしても、確かに全然強く打てなかったけど、グロウがやったらものすごく痛くできる気もする。
でも、つまりグロウが力を加減してくれれば、鞭で打たれてもそんなに痛くないってことかもしれない。
「い……痛くしない？」
「誓おう、我が姫。あなたが望む以上には」
私は、私の手の中にある鞭をしばしもてあそぶ。
そして、勇気を振り絞ってグロウに差し出した。

2

私がグロウを受け入れた日から、グロウは少しずつ地下室を作り変えつつあった。
最初にグロウが手を付けたのは、天井に滑車と鎖を取り付けることだ。
鎖の先には当然のように手錠があって、その手錠は今、私の両手首にかけられている。
グロウが滑車を回すと、私の腕は引き揚げられ、肘が軽く曲がるくらいの位置で停止する。
吊るさないの？　とちらっと聞いたら、グロウは笑って「もう少ししたら試してみようか」と言われてしまった。
別に将来的に吊るしてほしいと思ってるわけじゃないし、よくよく考えたら、手首に全体重をかけて吊るされたら絶対にケガをする。
いつかグロウが回すこの滑車が、私の腕が完全に伸びきるまで引っ張られて、私のつま先が床から浮き上がる日が来るんだろうかと思うと、鎖に繋がれることすらちょっと不安になってくる。

「落ち着かないな、我が姫」
滑車を固定したグロウが、私にゆっくり歩み寄ってくる。
「ん……吊るされたら、手首痛そうだなって」
「また吊るされることを考えていたのか？」
「吊るされたいわけじゃないからね？」
「しかし興味はある」
「どっちかっていうと恐怖だけど……」
「恐怖？」
「怪我しそう」
私は、私を拘束している手錠を見た。
グロウはきょとんとしてそれを見返し、ふと声を上げて笑った。
「どうして笑うの？」
「いや、すまない。なるほど、そうか。このまま鎖で吊るされるかもしれないと思っていたのか」
「ち、違うの？」
「苦痛を与えるのが目的ならば、それもありだろう。手首に体重をかけて天井近くまで吊るし上げ、床に当たる直前まで落とす。すると、肩の関節が抜けるだろう？」
「抜けるの？」
「抜けるんだ。肩の関節は抜けやすい。その状態で、もう一度吊るす。そしてまた同じように落とすと、今度は肩の靭帯に致命的な損傷が入る」
私は、横目でちらと滑車を見た。
なんとなく、手錠をがちゃがちゃいわせてみるけど、自力ではずれそうにない。
つまり私は今、グロウは少しその気になれば、そういう苦痛を与えられる状況にあるということになる。
「――怖いか？」
急に、からかうように耳元でささやかれて、私はびくりと肩をすくませた。
けど、私は首を左右に振る。
「大丈夫……怖くないよ。グロウは私に何かする時、ちゃんと説明してくれるし、嫌だって言うことはしないから」
グロウは穏やかに微笑んだまま私の頬を手の甲でさらりと撫でて、子供にするように額にキスをした。
「私の忍耐力が、その信頼に報いることができることを祈っていてくれ」
「報いれなくなったら逃げるもの」
「ヴィスクのところに？」
きんと、空気が張り詰めたような感じがあった。
グロウの表情は、相変わらず穏やかで優しげだ。

けど、その目から温かさがすっと消えて、人のぬくもりを奪うような冷たさが宿ってる。
あぁ――始まる。
私がごくりと息をのむと、グロウは手にした鞭を振り上げた。
そして、思い切り振り下ろす――床に。
細い鞭が空気を鋭く切り裂いて、パンッと音がはじけた。
その鞭が私に当たることはなかったけど、鞭が床を叩く衝撃が、空気を伝ってビリビリと私を震わせる。
あぁ、全然違う。
私が力を込めて振り下ろした時とは、全然。
心臓が早鐘をうつようだった。耳の奥でドクドクと血が流れて、全身にじっとりと汗がにじむ。
緊張感と、恐怖心の、ちょうど真ん中に立っているようだった。
グロウは私を傷つけない。絶対に大丈夫。
そう信じているけど、体は痛みを警戒して緊張してる。
グロウは何も言わないままわざとらしく足音を立てて、私の背後に回った。
私は鎖で吊るされてるだけだから、その気になれば振り向ける。
でも、グロウに背を向けたまま黙って立ち続けた。
ヒュ――と、鞭が振り下ろされる音がした。
バシン、と音がして、突き飛ばされるような衝撃に、私の体は軽くよろける。
あとから、痺れるような痛みがじわじわと背中全体に広がってきた。
気づくと私は息を止めていて、慌てて大きく息を吸う。
痛い？
痛かった？
わからない。
でも、まだ大丈夫だと思う。
また、鞭を振り上げる音がした。
衝撃。
音。
痛み。
「あっ……く……」
二度目の鞭で、声がこぼれた。
心臓が痛いくらい激しく鼓動して、体が勝手に震えだす。
思ったよりは全然痛くないし、怖くない。
けど、体が勝手に恐怖を感じてるようだった。
また、鞭が空を切る。

一度目の衝撃があった。
立て続けに、二度目の衝撃。
「いッ……た……」
ようやく痛みを感じて、私は身をよじった。
その背中に、また鞭が振り下ろされる。
「待って、もうやだ……！　もうやめて……！」
思わず叫んだ私の体を、グロウが背後から急に抱きしめた。
「終わりだ、これで終わり」
背中全体がひりひりして、熱い。
グロウに抱きしめられた私の体からどっと力が抜けて、同時に涙がボロボロとあふれ出した。
私は手錠をがちゃがちゃ鳴らしてもがく。
「おろして……早く……！」
グロウは滑車をおろす時間も惜しむように、私を拘束する手錠の鍵を外してくれる。
膝が震えて、まともに立っていられなかった。
その場に崩れ落ちそうになった私を正面から抱きとめて、私の震えを抑え込むように強く抱きしめてくれる。
「ど、どうしよ……ふるえ、とまんな……ッ」
「大丈夫、大丈夫だ。拘束されて、苦痛を受ければ、最初はだれでもそうなる」
私はグロウの体を抱きしめ返した。
グロウはそんな私の髪を何度も撫でて、額にキスをして、安心するリズムでゆるゆるとゆすってくれる。
まるで、怯える子供をあやす親みたいだと思った。
実際、似たようなものなのかもしれない。
私に恐怖と苦痛を与えたのはグロウだけど、親だって自分で子供に恐怖と苦痛を与えておいて、あとで優しく甘やかす。
「背中、熱い。私、ケガしてる？」
「いいや。服の下は赤くなっているだろうが、明日には赤みも引いている」
「痛くしないって約束したのに……！」
「あなたが望む以上には、と誓った」
「望んでない！　全然望んでなかった！」
「そうか……そうだな。どうか、愚かな私を罰してくれ」
たったの、五回。
グロウが私に鞭を振り下ろしたのは、たったそれだけだ。
こんな事で、グロウの加虐心が満たされたわけがない。
だけど私は、これ以上を受け入れてあげることができなかった。

「ごめん……私、全然我慢できなくて、ごめんなさい……」
私はグロウの肩に顔をうずめたまま、その顔を見ることができない。
グロウが怒っていないのはわかってる。
でも、どんな顔をしてるか想像することができなくて、それを知るのが怖かった。
少しも痛みに耐えられなかった私に失望してるだろうか。それとも、八つ当たりのように私に責められて落ち込んでるだろうか。
「我が姫……過ぎた望みかもしれないが、どうか……顔を上げて私を見てくれ」
私の考えを呼んだみたいに、グロウが私を呼ぶ。
恐る恐る顔を上げると、人をぐずぐずにとろかすような優しげなまなざしが、世界で一番の宝物を見るみたいに私を見ていた。
「あなたはよく耐えてくれた。最初の一振りすら堪えれられないと思っていたんだ、本当は。鞭を見せただけで逃げられるかと思い、恐れていた」
グロウは唇で私の涙をぬぐってくれる。
「ありがとう。――愛している」
キス、される。
そう思った時、私はもう唇を開いて。舌を差し出して、うっとりと目を閉じていた。
重なった唇からグロウの分厚い舌が入り込んできて、私の舌を慰めるように愛撫する。
優しい声、優しいまなざし、優しい手、優しい唇、優しい舌――。
背中だけがじんと熱くて、痺れるように痛くて、私がぐちゃぐちゃになっていく。

3

グロウは私の震えが完全に落ち着くのを待ってから、私を抱き上げて地下室を出た。
グロウはいつも優しいけど、地下室を出た後はまさに〝溺愛〟という言葉がふさわしいほど私に甘い。
ベッドにうつぶせに倒れた私の背中を、氷水に浸して硬く絞った布で繰り返し冷やしながら、グロウは私に愛をささやき、髪にキスして、手を握り続けてくれた。
「ねぇ……はしたない質問してもいい？」
「快諾はしがたいが、私にはそれに答える義務があるだろうな」
「グロウは、私を鞭で叩いて興奮するの？」
「そうだな。その理解で正しい」
「興奮するってことは、その……したくなるってことでしょ？」
「なぜそう思う？」
「だって、いつも地下室では……するから……」
私を鎖でつないで、目隠しをし、時にはさるぐつわも噛ませて、嬲るように私を犯す。

「本当は今日も、したかったのに……私が堪えられなかったから……我慢してるのかなって思って……」
だとしたら、我慢させてしまって申し訳ない。
だからと言って、「じゃあ今から」と言われると、全然そんな気持ちにもなれないのだけれど……。
私がもだもだしていると、ふ、とグロウが柔らかい笑みをこぼした。
枕を抱いてうつぶせになっていた私は、首だけをグロウの方に向ける。
「なるほど……どうやら私は、口にしづらいことを告白しなければならないようだな」
「告白？」
「あなたの背中を五度、鞭で打っただろう？」
「うん」
「四度目で止めるつもりだったんだ、本当は。だが抑えきれず五度目を振り下ろし、その時私は一度果てた」
「……うん？！」
「あなたは背を向けていたから気づかなかっただろうが、あの時の私は触れただけで果てかねないほど興奮していたんだ」
涼しい顔でとんでもない告白をされて、私はぽかんとグロウを見返した。
「つまりグロウは……私を鞭で叩くだけでイけちゃうの……？」
「そうだな」
「へ、変態！」
私が叫ぶと、グロウは笑った。
「それはあなたも知っていると思っていたが」
「ここまでとは思ってなかった」
「私の集めた書物を読み、私の地下室での振る舞いを知っておきながら？」
「サディストなのは知ってたけど……最後はやっぱり、したいのかなって……」
「あなたが私に叩かれることで果てるようになれば、地下室での戯れはベッドの上で愛を交わすのと同義になる」
「そ、それは一生ならないと思うけど……」
完全に引いた口調で私が言うと、グロウは悪戯っぽく目を細める。
「では、一生をかけてあなたを調教してみせよう。楽しみにしていてくれ、我が姫」

END